

☪ 本守護神、正守護神、副守護神とは ☪

H27.05

霊界物語の中に本守護神（ほんしゅごじん）、正守護神（せいしゅごじん）、副守護神（ふくしゅごじん）という言葉が出て来ます。一般的な言葉としての守護霊（神）と大本で言う守護神は意味が違うようです。ここで理解を深めるために一般的な守護霊についてウィキペディアから抜粋してみます。

『守護霊とは』

守護霊（しゅごれい）とは、人などに付きその対象を保護しようとする霊のことである。西洋の心霊主義における「Guardian Spirit」の訳語として、心霊研究家浅野和三郎が提唱して定着したものとされる。

概要

生まれつき何らかの要因（生まれた時期や季節など）によって所定の霊が付くと考える人や、先祖など当人に縁のある故人であると考え人、また当人の行いによって良い行い（徳）を積むことで良い霊が集まるという人もある。いずれにせよ当人が災難にあわないよう守ってくれている、と考えられている。

特に祖霊信仰など、先祖が子孫を守護していると考える信仰では、先祖を祭ることで守護霊の力を強め、現世における子孫の生活をより強く守ってもらおうとすることもある。その一方で、トーテムのように自らの部族や一族に所定の動物の霊的な力が作用していて、これの力を得ようという考え方もあり、生きている側の働き掛けによって守護する側の霊にも何らかの影響が現れるという考え方もある。

スピリチュアリズムにおける守護霊

スピリチュアリズムにおいては、守護霊は生者をサポートする守護霊団（浅野和三郎の言うところの背後霊）の中心となる霊で、すべての生者には必ず担当の守護霊がつく。《これを見ると浅野和三郎氏は大本の守護神を理解していなかったようです。》

また、守護霊は霊格が高く現世とは離れた所（霊界）にいるために直接現世に干渉することが難しいとされ、より現世の近くで活動できる指導霊や補助霊などの助けを借りることで守護霊自身の役目を果たすという。また守護霊は高次元の霊視で視られるとも言われる為、一般の霊能者には本物の守護霊を霊視する事はほとんどないとされ、この説に則るならスピリチュアリズムの知識のない霊能者が指導霊や補助霊、若しくは憑依霊を守護霊と視誤るケースが少なくないと考えられる。

さらに、守護霊はどの霊になるかについては、「約400年前から500年前（或いは700年前）に他界した古い祖先霊が守護霊となる」という説のほか、類魂説（生者の魂は霊界に存在する固有の霊団グループソウルに属していて、その一部が分霊となって肉体に宿っているとする説）においては本人の所属する類魂の霊、ないしはその類魂に関係の深い高級霊になると考えられている。

以上が一般的考えですが玉鏡「他神の守護」には以下のように示されています。

『私は常に「上帝一霊四魂ヲ以テ心ヲ造り、之ヲ活物ニ賦ス。地主三元八カヲ以テ体ヲ造り、之ヲ万有ニ与フ。故二其霊ヲ守ル者ハ其体、其体ヲ守ル者ハ其霊也。他神在ツテ之ヲ守ルニ非ズ。即チ天父ノ命永遠不易」と説いている。「他神在ツテ之ヲ守ルニ非ズ」といふことは、自分の天賦の霊魂以外に他の神がかかつて守護するといふ事はないといふのである。』とハッキリと守護霊なるものは無いことがわかります。

物語の中では「守護神」と言う言葉が沢山でて来ます。その人を守ると言う意味で使われることもありますが、多くの場合その本人の霊魂（正、本守護神）や他から入り込んだ霊（神懸や神憑の副守護神等）を指します。

い、『本守護神、正守護神、副守護神』

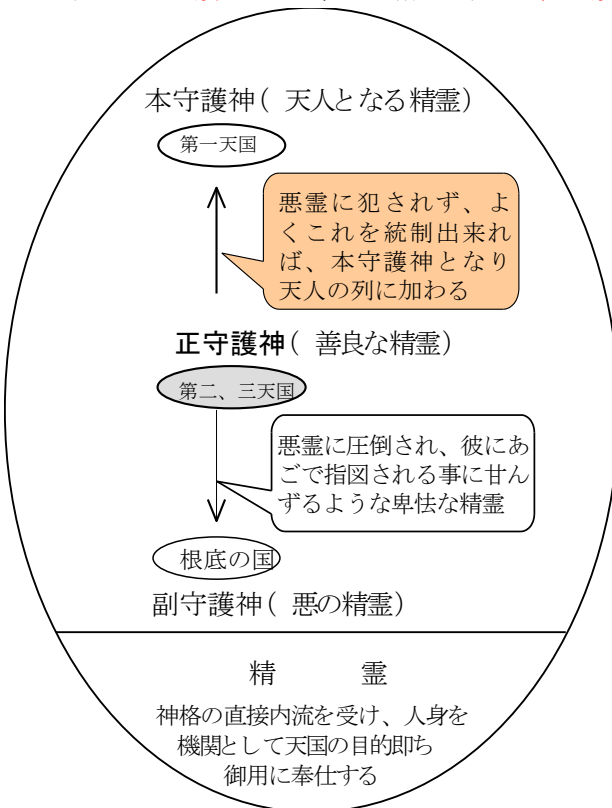
〔1〕 『直日の御霊の本守護神をして』【6-36 三五教】とあります。

人の本体は直日の御霊です。別名（肉体の方面から見ると）を本守護神と云います。

現界に居る人を身魂みたまというように肉体（身）と魂とが一体になっています。肉体を維持して行くのに必要な霊を副守護神と云い、本体である神の分霊を正守護神と云います。従って人（霊止）が現界に居る時は正、副の二霊の守護神によって生かされています。そして、正守護神が正しい働きをして向上し、高天原に行ける状態を本守護神と呼びます。

第47巻 第7章「酔やちまたの八衢」

P110 『人間の肉体はいわゆる精霊の容物だ。精霊の中には天国へ昇つて天人となるのもあれば、地獄へおちて鬼となるのもある。天人になるべき霊を称して、肉体の方面から之を**本守護神**と云ひ、善良なる精霊を称して**正守護神**と云ひ、悪の精霊を称して**副守護神**と云ふのだ』



辰公『人間の体の中には、さう本正副と三色も人格が分つて居るのですか』

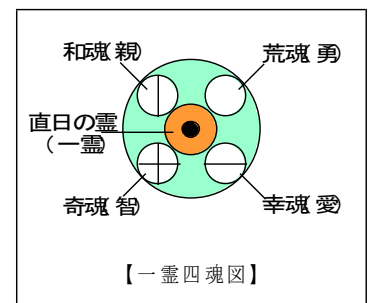
『マアそんなものだ。吾々は天人たるべき素養を持つてゐるのだが、肉体のある中に天人になつて、高天原の団体に籍をおく者は極めて稀だ。今の人間は大抵皆地獄に籍をおいてゐる者ばかりだ、少しマシな者でも、漸く精霊界《中有界》に籍をおく位なものだよ。此精霊界に於て善悪正邪を審かれるのだから、最早過去の罪を償ふ術もない。あゝ之を思へば、人間は肉体のある中に、一つでも善い事をしておきたいものだなア』

《 治国別と竜公の会話です。精霊が現界に生まれ来るには肉体を住居としてそこに生活するのが**正守護神**です。**正守護神**が悪霊に犯されず自分を制御できれば本守護神と呼ばれ、天国に籍を置く。また悪霊にあごで使われるような状態になった時を副守護神と言ひ、地獄に籍を置く。精霊界（天の八衢）で善悪正邪

を審判されるので死んだ後に罪を償うことはほとんど出来ない 》

〔2〕 守護神（本守護神・正守護神・副守護神）

総て神が一物を造り玉ふのには、仮令一塊の土を造るのにも、三元八力といふ諸原素、諸霊力に拠られるのであります。剛、柔、流の三元（鉞物、植物及び動物はこの元素よりなつてゐる）と八力（溶かす力、和す力、引張る力、ゆるむ力等八つの力）をもつて、一つの物が造られてゐるのであります。そして人の身体も其の如く出来て



居るのであります、そこへ一霊四魂といふ魂即ち勇智愛親の働く所の魂を、御與へになつて居るのであります。一霊は直日の靈である、四魂の荒魂、和魂、奇魂、幸魂は四つ個々別々にあるのではなく、これは智である、これは愛である、これは親であるなどその魂の働きを云ひ表はしただけで、元は一つであります。その時の所謂心境の変化で勇となり、智となり、愛となり、親となるのであつて、本当は一つのものであります。直日の靈、これ一つが本当の心なのです。それ以外に外から神様が来ると思ふのは違つて居る。

吾々がこの地上に降つたのは、**本守護神**が降つて来たのである。が、この物質界に生れて、衣食住の為に色々と心を曇らし、色々と画策をするが為に、「**正守護神**」又は「**副守護神**」といふものが出来て来たのであります。

「**副守護神**」といふのは実際は、悪霊といふ事でありませぬ。もとよりの悪霊ではないが、人間の心が物質によつて曇らされて、悪霊になつて居るのである。けれども総ての事を見直し、宣り直す教であるから、「**副守護神**」と云つて居るのであるが、実際は「**副守護神**」といふのは悪霊の意であります。折角のよい靈が悪くなつたのである。けれども人間の心に悪霊が居ると云うと具合が悪いから、**副守**が居ると云つただけであります。

【神の国 1932《昭7》／02／07 於宣伝使會合講話筆録】

《 この場合本靈たる本守護神が物質によって悪に傾き悪霊となつた状態を副守護神と呼ぶ。 副守護神＝悪霊の情態 》

〔3〕 第47巻 第12章「天界行」

P175-5 併しかしなが乍ら精靈が人の肉体を宿とし、現世に在りし頃善靈即ち**正守護神**の群に入るべき生涯や、或は天人即ち**本守護神**の群に至るべき生涯を送つて居らなかつたならば、彼等精靈は之等の天国的善靈を離れ去らむと願ふものである。斯の如くにして精靈は遂に現世に在つた時の生涯と一致する精靈と共に群居するに非ざれば、どこ迄も此転遷このてんせん《移り変わる事》を休止せないものである。……………

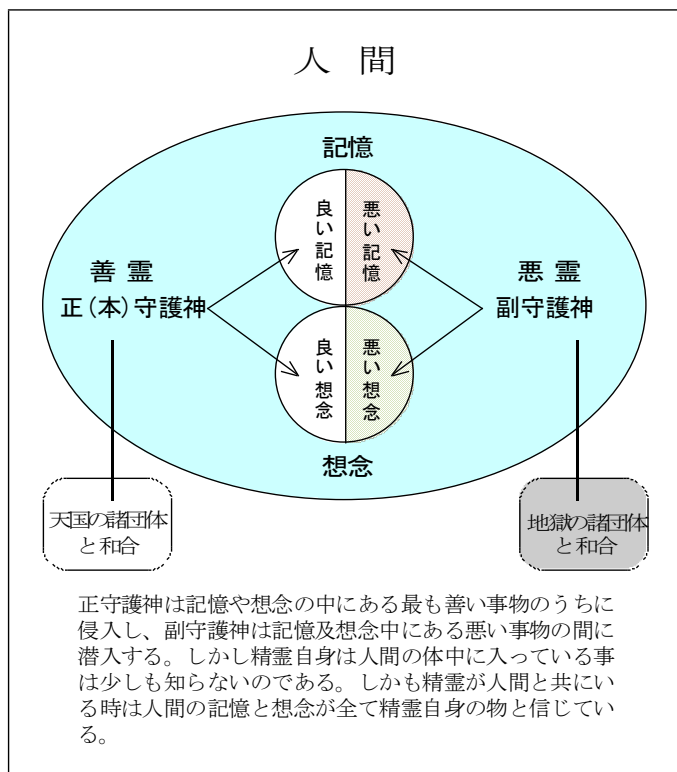
斯の如く自己生前の生涯に準適せるものを発見するに及んで、彼れ精靈は茲に又在世中の生涯に相似せるものと共に送らむとするものである。実に靈界の法則は、不思議なものと云ふべきである。

《 天国に行こうと思つたら、生前現世にあつたとき善い行いをして**正守護神**や**本守護神**と同じ心の状態を維持していかなかつたら天国へ行くことが出来ませぬ。それは必然的に己の心の状態と同じ所を選んで移り行くからです（同気相求む。）。靈界は想念の世界であるが故に、現界と違つて同じ心の状態、気持ちの合つた精靈としかいられないのです。現世でもそれは同じで、考え方や気持ちが合えば仲間をつくりませぬ（類は友を呼ぶ）が、心が合わなければ自然と離れていくものです 》

P176-2 凡て人間の身には善と悪と二種の精靈が潜在すべ《ひそみかくれる》してゐる事は前に述べた通りである。而して人間は善靈即ち**本守護神**又は**正守護神**に仍つて高天原の諸団体と和合し、悪靈即ち**副守護神**に仍つて地獄の団体と相応の理に依りて和合するものである、此等の精靈は高天原と地獄界の中間に位する中有界即ち精靈界に籍を置いてゐる。此精靈が人間に来る時には、先づ其記憶中に入り、次に其想念中に侵入するものである。而して**副守護神**は記憶及想念中にある悪き事物の間に潜入り、**正守護神**は其記憶や想念中にある最も善き事物の裡に侵入し来るものである。されど精靈自身に於ては其人間の体中に入り、相共に居る事は少しも知らないものである。而も精靈が人間と共なる時は凡て其人間の記憶と想念とを以て、精靈自身の所有物と信じてゐる。

《 **正守護神**や**副守護神**は人間の記憶の中に入り込み、次に其想念（考え思ふこと）中に居るのであるが、その人間の肉体の中に入り、共に居ると思つていない。しかも精靈（**正守護神**や**副守護神**）が人間と共に居る時は凡てその人間の記憶と想念を精靈自身のものと信じてゐる。 》

P176-9 又彼等精霊なるものは、人間を見ることはない。何故なれば、現実の太陽界に在る所の者は、彼等精霊が視覚の対境とならないからである。大神は此等の精霊をして、其人間と相伴へる事を知らざらしめむが為に大御心を用ひ給ふ事頗る甚深である。何故なれば彼等精霊がもし此事を知る時には、即ち人間と相語ることあるべく、而して副守護神たる悪霊は人間を亡ぼさむ事を考へるからである。副守護神即ち悪霊は



根底の国の諸々の悪と虚偽とに和合せるものなるが故に、只一途に人間を亡ぼし地獄界へ導き、自分の手柄にしようとし希求するの外、他事ないからである。而して副守護神は常に人間の心霊即ち其信と愛とのみならず、其肉体をも挙げて亡ぼさむことを希求するものである。故に彼等の悪霊が人間と相語らふことがなければ、自分は人間の体内にあることを知らないのだから、決して害を加へないのである。彼等悪霊は其思ふ所、其相互に語る所の事物が、果して人間より出で来るものなりや否やを知らないのである。何となれば彼等精霊の相互に物言ふは、その実は人間より来るものなれども、彼等は之を以て自分の裡よりするものなりと信じ切つてある。而して何れの人も自分に属する所を極めて尊重し、且之を熱愛するが故に、精霊は自ら之を知らないけれども、自然的に人間を愛し、且つ尊重せなくてはならない様になるのである。これ全く瑞の御霊大神の御仁慈の御心を以て、かく精霊に人間と共なることを知らしめざる様取計らひ給うたのである。

《 現界において人間と副守護神との関係は、副守護神は自分が人間の肉体中にいると思っていない。もしその事を知ったら、信と愛（魂の本質）だけでなく、肉体もともに亡ぼそうと考えるのです。しかし、副守護神自身が人間の体内に居るとは思っていないので決して人間に害を加えることはないのです。精霊（正、副守護神）が物を言うのは実際は人間の記憶や想念を基としているので彼等はこれを自分自身のものだと思切っているのです。どんな人も自分に属する物を大変尊重し、これを熱愛するので、精霊が入り込んでいる人間を自然に愛し、しかも尊重するのです。これは全く瑞の御霊大神の御仁慈の御心で、精霊に人間の中にいることを知らせない様に取計られたのです 》

P178-2 天国の団体に交通する精霊も、地獄界と交通せる精霊も亦同じく人間に付添うてゐるのは前に述べた通である。而して天国の団体に交通してゐる精霊の最も清きものを真霊又は本守護神と云ひ、稍劣つたものを正守護神と云ひ、地獄と交通する精霊を悪霊又は副守護神といふのである。併し人間が生るるや直に悪の裡に陥らねばならない事になつてゐる。故に当初の生涯は全く此等精霊の手の裡に在りと云つてもいいのである。人間にして若しおのれと相似たる精霊が付添うて守るに非ざれば、人間は肉体として生くることは出来ない。又諸々の悪を離れて善に復ることも出来ないことになるのである。人間の肉体が悪霊即ち副守護神に仍つて、おのれの生命を保持し得ると同時に又善霊即ち正守護神に仍つて、此悪より脱離することを得るものである。人間は又此両者の徳に仍つて、平衡の情態を保持するが故に意思の自由なるものがある。此自由の意思に仍つて以て、諸々の悪を去り又善に就くことを得、又其心の上に善を植ゑつくる

ことを得るのである。人間が若しも斯の如き自由の情態に非ざる時は、決して改過遷善の実を挙ぐることは出来ない。然るに一方には根底の国より流れ来る悪霊の活動するあり、一方には高天原より流れ来る善霊の活動するありて、人間は此等両者の中間に立ち、天国、地獄両方の圧力の間に挟まらなくては、決して意思の自由はあるべきものでない。

P179-5 又人間に自由のない時は、生命あることを得ない。又善を以て他人に強ゆる事は出来ない、人から強ひられたる善其ものは、決して内分の靈魂に止まるものでない、心の底に何うしても滲み込む事は出来ない、但自由自在に摂受した所の善のみは、人間の意思の上に深き根底を下して、宛然《まるで》其善をおのれの物の如くする様になるものである。

《人間の体内には天国と繋がりのある**本守護神**又は**正守護神**がおり、また地獄と繋がっている**副守護神**が共にいる。人間が生まれた時は靈肉共にまだ未熟であるため、しばらくはまず肉体を維持して行くために**副守護神**の影響を大きく受ける（直に悪の裡に陥る）。成長するに従い次第に靈的発達を遂げて行く。即ち、人間の肉体が**副守護神**(悪霊)によって自己の生命を維持し、同時に**正守護神**(善霊)によってその悪より脱離することが出来るのである。人間はこの両者の徳によつて、釣り合いの取れた情態《心の有様》を維持できるので意思の自由が生まれる。

根底の国から流れて来る悪霊の活動があり、一方には高天原より流れて来る善霊の活動があつて、人間は天国、地獄両方の圧力の間に挟まれているのでなければ決して意思の自由は得られない。この自由の意思によつて、諸々の悪から離れ善に就くことができるし、又その心の上に善を刻みつけることが出来るのである。人間がもし、この様に自由の情態にない時は、決して間違いを正すことは出来ない。

これは聖師が言われる障子と鴨居や敷居との関係である。障子（人間）は鴨居（天国）と敷居（地獄）の間に挟まれているから自由に行き来（意思の自由）できるのである。もし鴨居か敷居のどちらかが欠けたら障子は決して自由に動くことは出来ないし、自立すらできない。

又人間に自由がなければ生きていくことは出来ない。又善だからといって他人に強要することは出来ない。他人から強いられた善は決して靈魂に止まらず、何うしても心の底に滲み込む事は出来ない。しかし自分から進んで得た善は人間の意思の上に深く根を下して、まるでその善を自分の物の様に出来るのである 》

〔4〕 第48巻 第1章「聖言」

P7-8 靈なるものは神の神格なる愛の善と信の真より形成されたる一個体である。而して人間には一方に愛信の想念あると共に、一方には身体を發育し現実界に生き働くべき体慾がある。此体慾は所謂愛より来るのである。併し体に対する愛は之を自愛といふ。神より直接に来る所の愛は之を神愛といひ、神を愛し万物を愛する、所謂普遍愛である。又自愛は自己を愛し、自己に必要な社会的利益を愛するものであつて、之を自利心といふのである。人間は肉体のある限り、自愛も又必要欠くべからざるものであると共に、人は其本源に遡り、どこ迄も真の神愛に帰正しなくてはならぬのである。

《靈魂は神の神格（神の本質）である愛の善（天国）と信の真（靈国）より形づくられた一個体（一靈四魂）です。人間はこの神の神格を受け継ぐ愛信の想念と共に肉体を發育、維持する体慾があります。体慾は同じ愛から来ているといつても自分だけを利するのが目的の愛であり、これを自愛又は自利心といいます。神より直接来る愛を神愛といひ、神を愛し万物全てを愛する愛で普遍愛といひます。人は現界に生きる以上は肉体を維持するため自愛は必要欠くべからざるものですが、魂の根源に立ち帰り真の神愛と結びつかなくてはならないのです。

人間は靈界より見れば善悪両面を持った精靈であり、靈的動物であると同時に体的動物です。魂の向上によつ

て天人ともなり、墮落すれば地獄の邪鬼ともなります。又、神界より見れば人間の肉体を宿として精霊界にさ迷っているのです 》

P8-8 ^{しか} 而して精霊の善なるものを**正守護神**といひ、悪なるものを副守護神と云ふ。**正守護神**は神格の直接内流を受け、人身を機関として天国の目的即ち御用に奉仕すべく神より造られたもので、此正守護神は副守護神なる悪霊に犯されず、よく之を統制し得るに至れば、一躍して本守護神となり天人の列に加はるものである。又悪霊即ち副守護神に圧倒され、彼が^{いちやく}願使《あごで指図して人を使う》に甘んずる如き卑怯なる精霊となる時は、精霊自らも地獄界へ共々におとされて了ふのである。此時は殆ど善の精霊は悪霊に併合され、副守護神のみ我物顔に^{ばつこちやうりょう}跋扈跳梁するに至るものである。

P9-1 そして此悪霊は自然界に於ける自愛の最も強きもの即ち外部より入り来る諸々の悪と虚偽に依つて、形作られるものである。かくの如き悪霊に心身を占領された者を称して、体主霊従の人間といふのである。又善霊も悪霊も皆之を一括して精霊といふ。現代の人間は^{ほとん}百人が^{まで}殆ど百人迄、**本守護神**たる天人の情態なく、何れも精霊界に籍をおき、そして精霊界の中でも^{がいぶん}外分のみ開けてある、地獄界に籍をおく者、大多数を占めてあるのである。

《 * **正守護神**は神の直接内流（意思の流入）を受け、人体を機関として天国の目的即ち御用（地上天国を作る）に奉仕すべく神より造られたもので、**正守護神**は**副守護神**である悪霊に犯されず、よくこれを支配できれば、一気に**本守護神**となり天人の列に加わるのです。

* 正守護神が悪霊即ち**副守護神**に圧倒され、彼にあごで使われるようなことを甘んじて受けるような卑怯な精霊となる時は、精霊自身もともに地獄界へ落とされてしまうのである。此時は殆ど善の精霊は悪霊に呑み込まれ、**副守護神**だけが勝手気ままにふるまうのである。そしてこの悪霊は自然界《現界》に於ける自愛の最も強いもの、即ち外部より入って来た諸々の悪と虚偽に依つて形作られるものです。この様に悪霊に心身を占領された者を称して、体主霊従の人間というのです。

* 現代の人間はほとんど百人中ほ百人まで、**本守護神**である天人の情態ではなく、誰も精霊界（幽界）に籍をおき、精霊界の中でも外分（体的方面）のみ開け、地獄界に籍をおく者が大多数を占めている。

● 情態：心のように働き

肉体から見た呼称	人間（人の本霊）	外部より来て人間に憑依する霊
本守護神	高天原に行く情態の靈魂	——
正守護神	天国に行く情態の靈魂 (善霊)	善霊で、 ◇公憑：甲の肉体にも乙にも丙にも丁にも臨機 応變的に憑依する神霊 ◇私憑：或る種の因縁を有する身魂、一人に限 つて憑依する神霊
副守護神	中有又は地獄に行く情態の靈魂 (悪霊)	悪霊で、「本、正守護神」を押し込み自由行動 を為す邪神、妖魅の別名

ろ、 『帰神、神懸、神憑』

〔1〕 第四八巻 第一章「聖言」に以下のように書かれている。

12-10 茲に靈界に通ずる唯一の方法として、^{ちんこんさしん}鎮魂帰神なる^{かむわざ}神術がある。人間の精霊が直接^{だいげんすん}大元神即ち主の

神（又は大神といふ）に向つて神格の内流を受け、大神と和合する状態を帰神といふのである。帰神とは、我精霊の本源なる大神の御神格に帰一和合するの謂である。故に帰神は大神の直接内流を受くるに依つて、予言者として最も必要なる靈界真相の伝達者である。次に大神の御神格に照らされ、知慧証覚を得、靈国に在つてエンゼルの地位に進んだ天人が、人間の精霊に降り来り、神界の消息を人間界に伝達するのを神懸といふ。又之を神格の間接内流とも云ふ。之も亦予言者を求めて其精霊を充たし、神界の消息を或程度まで人間界に伝達するものである。次に、外部より人間の肉体に侵入し、罪惡と虚偽を行ふ所の邪霊がある。之を悪霊又は副守護神といふ。此情態を称して神憑といふ 【48/1 聖言】

- 《 ● 帰神：主神の神格が直接人間に降る場合。我精霊の本源なる大神の御神格と帰一和合すること。
 ● 神懸：靈国にいるエンゼル（大神の御神格に照らされ、知慧証覚を得た天人）が人間の精霊に降り、神界の消息を人間界に伝達すること。
 ● 神憑：外部より人間の肉体に侵入し、罪惡と虚偽を行ふ所の邪霊。之を悪霊又は副守護神という。 》

〔2〕第18巻第10章「赤面黒面」

黒姫『そら何を云ひなさる。神憑には公憑、私憑と二つの種類がある。其中でも私憑と云ふのは、因縁の身魂丈によりお憑りなさらぬと云う事ぢや。国治立命は変性男子の肉体、日の出神は系統の肉体、竜宮の乙姫は又その系統の肉体と、チヤンと定つて居るのぢや。公憑と云うて、上の方の身魂にも、中の身魂にも、下の身魂にも臨機応変に憑ると云ふ様な、ソナナ自墮落な神さまとは違ひまつせ。 【18/10 赤面黒面】

《 「神憑には公憑、私憑と二つの種類がある」。この文から私憑は善霊であり、公憑は悪霊とも受け取れる。そうすると、「聖言」の文章に照らすと私憑は神懸で公憑は神憑となる。それで、ここでは神憑ではなく神懸の誤字ではないか 》

〔3〕神霊界 1919 《（大8）／10／15 随筆

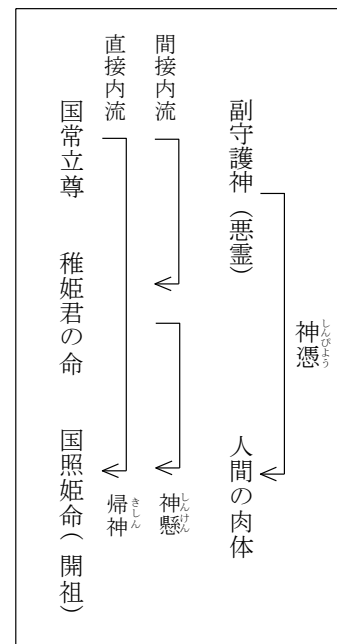
大本靈学の上から本守護神と称するは、仮令空介の肉体に、天賦的に具存《備わる？》する所の、天帝の分霊を指すので在ります。本守護神は鎮魂の神法を、修得するに於て帰神となり、完全に其靈能を發揮し神の御子として、天地経綸の司宰者たる天職を尽す事が出来得るのであります。

亦た「正守護神」と云ふのに、公憑私憑の二大別があります。公憑とは甲の肉体にも乙にも丙にも丁にも臨機応變的に憑依する神霊であり、私憑とは或る種の因縁を有する身魂、一人に限つて憑依する神霊を指すので在ります。

「正守護神」なるものは要するに、他より来つて人の肉体を機関として、神界の経綸を助け且つ又本守護神の天職を輔弼《天子の政治をたすけること。また、その役。》する所の、善良なる神霊であります。而して公憑は神懸と日ひ私憑は神憑と言ふのであります。【神霊界 大8／10／15 随筆】

- 《 公憑：甲の肉体にも乙にも丙にも丁にも臨機応變的に憑依する神霊＝神懸
 私憑：或る種の因縁を有する身魂、一人に限つて憑依する神霊＝神憑
 正守護神：他より来て人の肉体を機関として、神界の経綸を助け、かつ本守護神の天職を助ける役の善良な神霊。

この「正守護神」の部分は靈界物語 {聖言} と根本的に違ふ点である》



(大正12年)の3つに書かれている。これを整理すると。下表のようになりそれぞれが類似し、また違っている。三者三様とも言える。これは何故なのであろうか。神霊界の文章は聖師様の文章ではないのでは、またどこかに誤字があるのか? 》

	第48巻「聖言」(T12)	第18巻「赤面黒面」(T11)	神霊界「随筆」(T8)
帰神	主神の神格が直接人間に降る。 「直接内流」		本守護神は鎮魂の神法を修得することて帰神となる
神懸	エンゼル(霊国天人)が人間の精霊に降る。「間接内流」		公憑(臨機応変に誰にでも憑る神霊)
神憑	外部より人間の肉体に侵入する 邪霊	私憑(因縁の身魂にのみ憑る) 公憑(臨機応変に誰にでも憑る)	私憑(因縁の身魂にのみ憑る神霊)

物語の中では概ね神懸は善霊、神憑は悪霊の憑依として扱われている。どちらも「かむがかり」と読む。帰神は高等霊か鎮魂帰神の場合である。

は、『靈魂と肉体の関係』

〔1〕第15巻 第20章「五十世紀」に

玉彦『吾々は常に聞いて居ります。本守護神が善であれば、肉体もそれに連れて感化され、霊肉共に清浄潔白になり天国に救はれると云ふ事を固く信じてみました。斯う九分九厘で最上天国に行けぬと云ふことは吾々の本守護神もどうやら怪しいものだ。コロコロ本守護神、^{さいかたんでん}臍下丹田から出て来て、此の肉の宮を何故保護をせないのか、それでは本守護神の職責が尽せぬでは無いか。肉体天国へ行けば本守護神もが行ける道理だ。別に玉彦の徳許りでない、^{つく}矢張本守護神の徳にもなるのだ。何をグズグズして居るのかい』と握り拳を固めて臍の辺をボンボン叩く。

松彦『アハハハ、面白い面白い』

玉彦『之は怪しからぬ、^{せんしばんりょ}千思万慮を尽し、如何にして此鉄壁を通過せむかと思案にくるのを見て、可笑しさうに吾々を嘲笑なさるのか、貴方も余程^{けち}吝な守護神が伏在して居ますな』

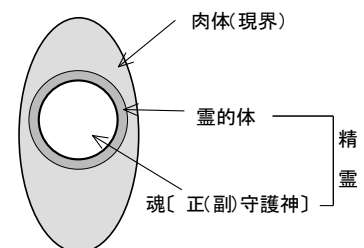
松彦『天国には恨みも無ければ悲しみも無い。^{またあざけ}亦嘲りもありませぬ。私の笑つたのは貴方の守護神が私の体を籍つて言はれたのですよ』

《 現界では人の正、副守護神が肉体を宿としていることはすでに述べました。霊界(天国)に入った玉彦は現界に肉体が残して来たはずなのに、天国に来た玉彦は守護神のみかと思っていたら、本守護神に文句を言っています。なんだかもう一つ肉体があるようです。霊界に入ると精霊と言いますがこの精霊が一種の肉体でしょうか。顕幽一致ですから靈魂は霊界に籍を置いているので靈的体をもつのでしょうか。? 》

現界 : [靈魂+肉体]

霊界(精霊界) : [正(又は副)守護神+靈的体]

以上は大変疑問のある所ですが以下にもそう思わせる箇所があります。



〔2〕第25巻 第11章「風声鶴唳」

^{むか}蜈蚣姫は驚きてもものも言はず、老の身も甲斐々々しく階段を降り行く。されど梅子姫、スマートボール其他の面々には、黄竜姫の姿並に蜈蚣姫の姿は依然として高殿に月を賞するかの如く見え居たり。それ故蜈蚣姫の^{あわて}周章で階段を降り行きし事も、黄竜姫が高殿より墜落せし事も夢にも知らざりし。要するに黄

竜姫、蜈蚣姫の**本守護神**は、依然として此高殿に其儘そのままの体を現はし、嬉々として月を賞しつつありしなり。二人が身体に残れる執着心の鬼の為に斯くの如き幻覚を起し、又其罪惡かたまりの凝固より成れる肉体は、**副守護神**の容器として高殿の下なる千仞の谷間に突き落されたるなりき。

後に残った黄竜姫の姿は、恰も鼈甲べつこうの如く身体半ば透き通りて一層の美を加へ、言葉も俄に涼しく且つ莊重を帯び来たりぬ。

梅子姫『黄竜姫様、不思議な事があるもので御座いますな。今迄の貴女のお姿とうつて変り、一人立派な御顔色、お身体の恰好までも、何処ともなく威嚴の加はつた様に思ひます。変ると言つても、斯う迅速に向上遊ばすと言ふ事は、不思議でなりません』

黄竜姫『ハイ、妾は勿体なくも三五教の神司となり、且地恩城の女王と迄上りつめ、稍得意の色を浮べ安心の氣にうたれて、勿体なくも月の大神様を玩弄物か何かの様に、酒肴を持ち出し月見の宴だと、花見か雪見の様な畏れ多い事を何とも思はず始めましたが、忽ち大空の月光菩薩の御威勢に照らされハテ、済まない事をした、妾は今こそ飛つ鳥も落す様な威勢で斯うして此処に安楽に暮して居るが、月の鏡に妾の古い傷がスツカリ写つた様な心持になり、月見どころか、穴でもあらば這入り度い様な心持になり、悔悟の念に苦しむ時しも、満天の星は黒雲に包まれ月影は影を隠し四面咫尺暗澹となりしと思ふ間もなく、ジャンナの郷に三五の道を伝ふる友彦は妾が昔彼に与へた凌辱りょうじよく《他人をあなどりはずかしめること》の怨みを復さむと数多の鬼を従へ、天上より鋼鉄の矛を雨の如くに降らせ、火の車を以て我肉体を迎へ来る其恐ろしさ。罪にかたまつた肉体の衣を神様の御恵に依つて剥ぎ取られ、又母上も子の愛に溺れ給ふ執着心の衣は、此谷間に落ちて白烟となり消え失せました。ア、斯くなる上は最早妾の肉体には一点の雲霧も無く、正に此中秋のお月様の如き身魂しんこんと生れ変つた様で御座います。それに就いては皆様、只今より月見の宴を廃し、神様にお詫を致しませう』

《黄竜姫は「勿体なくも月の大神様を玩弄物か何かの様に、酒肴を持ち出し月見の宴だと、花見か雪見の様な畏れ多い事を何とも思はず始めました」とあり、また前夫友彦を凌辱した思いに己の身を攻められた時、「罪にかたまつた肉体の衣を神様の御恵に依つて剥ぎ取ら」ます。即ち、其罪惡の凝固より成れる靈的肉体は、副守護神の容器として高殿の下なる千仞の谷間に突き落されます。副守護神の容器としての靈的肉体は滅び、本守護神の容器としての靈的肉体はそのまま残ります。現界での肉体はそのままなので梅子姫やその他の人は気付きません。

黄竜姫は一入立派な姿で、さらに威嚴まで加わって見えます。一方蜈蚣姫は子の愛におぼれ、その執着心の衣は、此谷間に落ちて白烟となり消え失せます。》

【3】第19巻 第16章「玉照彦」

松姫『ア、さうするとお前は肉の宮を館に残して置いて来たのだなア、跡は何うしなさつた』

熊彦『ハイ、肉の宮は千代彦と云ふ**本守護神**が守つて居ます』

松姫『ア、さうかな、それは御苦労だった、早く帰つて下さい、もう大丈夫だから』

熊彦『もう暫くお伴させて下さい』

神国守『ヤア、さう聞くと貴方が或人の幽霊だな』

松姫『これは私の家に居ります熊公と云ふ大変師匠思ひの男で、門番や受付をして居るので御座います、一心の誠が通つて靈魂が幽体を現じ、此処迄私を守つて来て呉れたのです』

国依姫『何と誠の強い、師匠思ひの方ですなア』

松姫は早くも何故か涙ぐんで居る。熊公の姿は煙の如く消えて仕舞つた。【19/16 玉照彦】P277

《これが幽霊の一つの概念でしょうか。師匠を思う一心の誠が幽体を現すとあります。よい思いも悪い思いも

強くなると幽霊として顕れるのでしょうか。念いとは不思議なものです 》

『副守護神の改心や離脱によって救われる本守護神』

注：【〇〇/〇〇】巻/章

以上は人間本体の霊魂についての事（説明）ですがこれとは別に、人に憑依する霊（副守護神・悪霊）の様々な関係（動き）について見てみましょう。

〔1〕 第17巻第4章「羽化登仙」の本当の意味は何でしょうか？

P68 因に、鬼彦、鬼虎、そのた三人の羽化登仙^{う かとうせん}せしは、その実肉体にては、徹底的改心も出来ず、かつ又神業に参加する資格無ければ、神界の御慈悲に依り、国替^{くにがえ}（凍死）せしめ、天国に救ひ神業に参加せしめ給ひたるなり。五人の肉の宮は、神の御慈悲に依つて、平助親子の知らぬ間に、或土中へ深く埋められ、雪崩に圧せられ、鬼彦、鬼虎に救ひ出されたお節は、その実鬼武彦^{けんぞく}の眷属の白狐^{しよる}が所為なりき。又夜中お節を送つて来た悦子姫はその実は、白狐^{しよる}明神の化身なりき。お節を隠したる岩窟は、鬼彦、鬼虎の兩人ならでは、救ひ出す事が出来なかつたのである。それは岩窟を開くに就て、一つの目標を知つて居る者は、此兩人と鬼雲彦より外になかつたから、鬼武彦の計らひに依つて、ここまで兩人を引寄せ、お節を救ひ出さしめ給うたのである。又途中に五人の男を裸にした娘のおコンは、白狐^{しよる}の眷属神の化身であつた。先に文珠堂にて別れたる悦子姫、及び平助の門口にて別れたる音彦、青彦、加米彦^{まないがだけ}は真名井ヶ岳の聖地に既に到着し居たりしなり。

《 ここには**本守護神**や**副守護神**という言葉は出て来ませんが先の「風声鶴唳 25/11」のように、肉体を持った状態ではその穢れがひどくいつ又元に戻るかもしれず、このままでは神業に参加することが出来ません。そこで神様のお慈悲により、第47巻20章間接内流にあるように**副守護神**（悪霊）の入れ物となつてしまつた肉体を捨てることで、本霊である**正守護神**が天界に救われたのです 》

【羽化登仙】：中国の古い信仰で、人間に羽が生えて仙人となつて天に登ること

〔2〕 第21巻 第9章 改悟^{むくい}の酬

P170 ……と玉治別が声を限りに歌ひ終れば、今迄現はれたる三人の姿は、又もや元の女神となつて天女の舞を舞ひ乍ら、中空さして昇り行き、遂には神姿^{すがた}も見えずなりにけり。遠州、駿州、武州の三人は涙を滝の如くに流しつつ感謝^{むせ}に咽ぶ。三人の背後よりは紫の雲、シユウシユウと湯烟の如く音をたてて頭上に高く立昇り、其中より蜃気楼の如く三人の女神現はれ給ひ、右手に鈴を持ち、左に日月の紋^{しる}を記したる扇を開いて中空に舞ひ狂ふ。之ぞ遠州、駿州、武州三人の副守護神が体を離れたるより、その精霊中の**本守護神**は喜び給ひて其神姿を現はし歡喜の意を表したるなりき。一同は此奇瑞に感歎し天津祝詞を奏上する折しも、雲州、三州、甲州の三人は、容色艶麗なる女神の手を引き、李助の前に現はれて、前非を悔い涙を流して合掌する。三人に手を引かれて此処に現はれし女神を見れば、こは抑如何^{そも}に、十年以前の壯健なりし花の盛りのお杉が姿なりければ、李助は思はず知らず、『ア、女房の精霊か、能くも無事に居てくれた』

『お母さま、よう来て下さいました』

とお初はお杉の精霊に取りついて嬉し涙に泣き崩る。甲州、雲州、三州の三人の後よりは又もや紫雲立ち昇り、以前の如く美はしき女神現はれ空中に舞曲を奏し、之亦雲中に神姿を隠しける。

暴悪無道の盗賊、三州、雲州、甲州も李助が娘のお初の誠心に絆され、一旦金銀は奪ひ取りて帰りしもの何となく後髪引かるる心地して、お杉の墓に知らず識らず引き寄せられしが、此時墓よりヌツと現は

れし影は、瘦せ衰へて死したる筈のお杉に《あらず》して、中肉中背の色飽迄白く元氣飽迄旺盛なる姿なりけり。お杉は之より娑婆の執着心をさり天国に上り、後に残せし夫並に一粒種の我娘の幸福を祈り、尊き天人の列に加はりける。

《羽化登仙とも似ているし、「本霊 13/21」でも、元ウラル教であった半ダースの宣伝使は木花姫の特訓によって立派な宣伝使に育ち上がり、やはり本守護神が女神の姿となって現れます。

暴悪無道の盗賊、三州、雲州、甲州も改心することで、各自に憑依していた副守護神が体を離れその精霊が本守護神となって喜んで神姿を現し中空に舞い狂うたのです。》

に、『人に憑依する副守護神（悪霊）』

〔1〕 第5巻 第三章 臭黄の鼻〔二〇三〕

P25 これより聖地エルサレム宮殿は、日夜に怪事のみ続発し暗雲につつまれた。八王大神常世彦はやや良心に省みるところあつて、窃に国祖大神の神霊を他知れず鎮祭し、昼夜その罪を謝しつつあつた。大神の怒りやや解けたりけむ、久振りにて東天に太陽のおぼろげなる御影を見ることを得た。随つて月の影が昇りそめた。八王大神は夜ひそかに庭園に出で、月神に向つて感謝の涙にくれた。されどその**本守護神**は悪霊の憑依せる副守護神のために根底より改心することは出来なかつた。

《ここでも羽化登仙「17/4」の様に、徹底的に悪に染まりきった常世彦の身魂（肉体と副守護神）は容易に善神に戻ることは出来ないようです。それは副守護神即ち肉体の汚れが影響しているのでしょうか。

本文に「悪霊の憑依せる副守護神のため」とある。常世彦は【48/1 聖言】に『悪霊即ち副守護神に圧倒され、彼が頼使《あごで指図して人を使う》に甘んずる如き卑怯なる精霊』となったのである。常世彦には八岐大蛇（悪霊）が副守護神に憑依し彼を墮落させてあごで使うため、本守護神とはなり得ず根底より改心出来ないのである。》

〔2〕 第48巻 第一章 聖言

P13 次に、外部より人間の肉体に侵入し、罪悪と虚偽を行ふ所の邪霊がある。之を悪霊又は副守護神といふ。此情態を称して神憑といふ。

すべての偽予言者、贖救世主などは、此副守の囁きを人間の精霊自ら深く信じ、且憑霊自身も貴き神と信じ、其説き教へる所も亦神の言葉と、自らを信じてゐるものである。すべてかくの如き神憑は自愛と世間愛より来る凶霊であつて、世人を迷はし且つ大神の神格を毀損すること最も甚きものである。斯の如き神憑はすべて地獄の団体に籍をおき、現界の人間をして、其善霊を亡ぼし且肉体をも亡ぼさむことを謀るものである。近来天眼通とか千里眼とか、或は交霊術の達人とか称する者は、何れも此地獄界に籍をおける副守護神の所為である。泰西諸国に於ては今日漸く、現界以外に霊界の在ることを、霊媒を通じて稍覚り始めたやうであるが、併し此研究は余程進んだ者でも、精霊界へ一步踏み入れた位な程度のもので、到底天国の消息は夢想だにも窺ひ得ざる所である。偶には最下層天国の一部の光明を遠方の方から眺めて、臆測を下した霊媒者も少しは現はれてゐる様である。霊界の真相を充分とは行かずとも、相当に究めた上でなくては、妄りに之を人間界に伝達するのは却て頑迷無智なる人間をして、益々疑惑の念を増さしむる様なものである。故に霊界の研究者は最も霊媒の平素の人格に就てよく研究をめぐらし、其心性を十二分に探查した上でなくては、好奇心にかられて、不真面目な研究をするやうな事では、学者自身が中有界は愚か、地獄道に陥落するに至ることは想念の情動上已むを得ない所である。

《まとめ：

1, 人間の肉体に外部より侵入し、罪悪と虚偽を行なわせる邪霊がいる。これもまた悪霊又は副守護神という。

この情態を神憑という。〔帰神（直接内流）、神懸（間接内流）、神憑（動物霊等）〕

2、すべての偽予言者や贖世主などは、この副守《護神》の囁きを人間の精霊と深く信じ、しかも憑霊自身も自分を貴き神と信じ、その説く教もまた神の言葉だと自然に信じているものである。すべてこの様に神憑は自愛と世間愛より来る凶霊であって、世間を迷はせ、しかも大神の神格を毀損《傷つける》すること最も甚しいものである。こうした神憑はすべて地獄の団体に籍をおき現界の人間（善霊）を亡ぼし且肉体も亡ぼすことを企てるものである》

〔3〕 第49巻第9章 善幻非志

P130 凡て人間は精霊の容器であつて、此精霊は善悪両方面の人格を備へてゐるものである。而して精霊が憑り切つた時は、其人間の肉体を自己の肉体と信じ、又其記憶や想念言語迄も、精霊自身の物と信じてゐるのである。併し乍ら鋭敏なる精霊は肉体と自問自答する時に、精霊自身に於て、自分は或肉体の中に這入つてゐるものなる事を悟るのである。而して精霊には**正守護神**と**副守護神**とがあり、**副守護神**なる者は人間を憎悪する事最も劇甚にして、其靈魂と肉体とを併せて之を亡び尽さむ事を願ふものである。而してかかる事は甚しく妄想に耽る者の間に行はるる所以は其妄信者をして、自然的人間に、本来所属せる歡樂より自ら遠ざからしめむ為である。此高姫は自ら精霊に左右され、而して精霊を神徳無辺の日出神と固く信じ、其願使《あごで指図して人を使う》に甘んじ、其言を一々信従し、且筆先を精霊のなすが儘に書き表はすが故に、精霊は決して高姫の肉体を憎悪し又は滅尽せむとせないのである。

《 精霊には**正守護神**と**副守護神**があり、副守護神には外部から神憑りした副守護神がある。人間（ここでは高姫）に精霊（副守護神）が神憑りした時は人間の肉体を自己の肉体と信じ、又其記憶や想念言語までも、精霊自身の物と信じている。鋭敏な精霊は肉体と自問自答する時、精霊自身がある肉体の中に這入っている事を悟るのである。通常、**副守護神**は人間を大変憎悪する事が激しい。そこで靈魂と肉体とを共に亡ぼそうと願うのである。こうした状態が起こるのは人間の持つ歡樂（天国の状態）より遠ざかせようとする為である。しかし、この高姫の場合、精霊を日の出神と深く信じており、あごで使われることに甘んじているから精霊は決して高姫の肉体を憎悪したり滅ぼそうとしないのである 》

空想に富み、熱情に盛なる高姫は常に其聞く所の精霊の何たるを問はず、悉く之を以て聖き靈なりと信じ、精霊の言ふが儘に盲従して、ヘグレ神社だとか、末代日の王天の大神だとか、ユラリ彦だとか、旭の豊榮昇り姫だとか、出鱈目の名を並べられ、宇宙唯一の尊き神を表はした如く、得意満面になつて、之を尊敬し、礼拝し、且其妄言を信じて、普く広く世に伝へむとしてゐるのである。斯の如き諸精霊は其実、僅に熱狂なる**副守護神**に過ぎない事を知らず、又斯の如き**副守**は虚偽を以て真理と固く信ずるものである。故に高姫も亦**副守**に幾度となく虚偽を教へられ、或は見当外れの嘘許りを書かされて、万一其筆先の相違した時は、神が気をひいたのだとか、御都合だとか、自分の改心が足らぬ故に混線したのだとか、いろいろの理窟をつけて少しも疑はず、益々有難く信じてゐるのである。

《 高姫のような人は信じたらとことん従うので純粹と言うべきかも知れないが、本当は無知蒙昧が高じただけで、元々の靈性が悪に傾いているので、何度も三五教に帰順するがすぐ元に戻ってしまう。度し難い存在である 》

ほ、『その他』

天授の本心に立帰り、**本守護神**の活動全く、至善至美の善神と改まりゐたる常世彦も、このとき一種の不安を感じ、天を仰いで嗟嘆《なげく》の声を漏らしける。この虚を狙ひみたる八頭八尾の大蛇の霊は、頭上よ

りカラカラと打ち笑ひ、 【4-35 頭上の冷水】 P213

道に神世の神人だけありて、その天性に立復り**本守護神**の発動に復歸したる時はすべて敵もなく味方もなく、怨恨、嫉妬、不平不満の悪心も発生する余地無かりしなり。かくのごとき至善、至美、至直の神心を天賦的に保有する神人といへども、天地間の邪気の凝結して現はれ出たる六面八臂の鬼や、金毛九尾の悪狐や、八頭八尾の大蛇の靈にその身魂を誑惑され、かつ憑依さるる時は、大神の分靈なる至純至粹の身魂もたちまち掌をかへすごとく変化するにいたる。その速かなること恰も影の形に随ふが如くなり 【4/36 天地開明】 P220

《 「頭上の冷水」にあるように、いったん改心して**本守護神**となった常世彦も、ちょっとした油断があるとそれを見透かして電光石火再び悪靈（八頭八尾の大蛇の靈）に憑依されてしまう。吾々も常に身を引き締め、四魂の働きを活発にし、直日の靈を働かせて省みることが必要です 》

人間が地球の陸地に出生して活動するのを、水火定と云ふ。故に地球は生物の安住所であり、活動経綸場である。また水火即ち靈体分離して所謂死亡するのを、身枯留、水枯定と云ふのは、火水の調節の破れた時の意であります。されど靈魂上より見る時は生なく、死なく、老幼の区別なく、万劫末代生通しであつて、靈魂即ち吾人の**本守護神**から見れば、単にその容器を代へるまでであります。【4-48 神示の宇宙その三】 P300

《 「水火定（いきる）」は水が体で、火が靈である。地上に生まれ来るのは靈と体が一体化する〔定まる〕ことで、「水枯定（まかる）」は靈が体を離れ枯れる事で死ぬことのようにです。これはあくまでも現界の体から見た考えで、靈魂即ち**本守護神**から見るときは永遠に生き通しである事がわかります。人は肉体を替え再生と復活を繰り返すことで神の経綸に奉仕し、身魂の向上が計れるのです 》

P105 『お前は天下の宣伝使、これ丈沢山の**御守護神**が隙間もなしに聞いて居るのが分らぬか。俺はお前に聞かすのぢや無い。其処らあたりの守護神に、お前の恥を振舞うて行く先き先きで神懸りさせて、お前の欠点をヒン剥かす俺の仕組を知らぬのか。それぞれそこにも守護神、それぞれあそこにも守護神、四つ足身魂も沢山に面白がつて聞いて居る。夫れが見えぬか見えないか。お気の毒ぢや、御気の毒では無いかいな』 【8/16 靈縛】

《 聖師は靈界物語を音読するようにと指導されています。この天地間には守護神がぎっしり折り重なっておられるそうです。したがってこの言靈（神の教え）を吾々と共に守護神が聞いておられるのです 》

玉彦『吾々は現界に於ても、心の鏡が曇つてゐる為、万事に付け行き当り勝ちだ、神界へ来ても矢張行き当る身魂の性来と見える哩。ア、どうしたら宜からうな。見す見す引返す訳にも往かず、何とか**本守護神**も好い智慧を出して呉れさうなものだなア』

松彦『貴方はそれだから不可ないのですよ。自分の垢を**本守護神**に塗付けるといふ事がありますか』

玉彦『吾々は常に聞いて居ります。**本守護神**が善であれば、肉体もそれに連れて感化され、靈肉共に清浄潔白になり天国に救はれると云ふ事を固く信じてみました。斯う九分九厘で最上天国に行けぬと云ふことは吾々の**本守護神**もどうやら怪しいものだ。コラコラ**本守護神**、臍下丹田から出て来て、此の肉の宮を何故保護をせないのか、それでは**本守護神**の職責が尽せぬでは無いか。肉体天国へ行けば**本守護神**もが行ける道理だ。別に玉彦の徳許りでない、矢張**本守護神**の徳にもなるのだ。何をグズグズして居るのかい』と握り拳を固めて臍の辺をボンボン叩く。【15/20 五十世紀】 P256

《 ここは第二天国から第一天国へ行く関門です。「**本守護神**が善であれば、肉体もそれに連れて感化され、靈肉共に清浄潔白になり天国に救はれると云ふ事を固く信じていました。こう九分九厘で最上天国に行けぬと云う

ことは吾々の**本守護神**もどうやら怪しいものだ。」ここでいう天国とは最上天国（第一天国）です。従って本守護神の行く所は第一天国です。正守護神の行く所は第二、三天国でしょうか。「肉体天国へ行けば**本守護神**も行ける道理だ」この肉体とは何でしょうか？ この玉彦はまだ死んで居ないので精霊としての肉体でしょうか 》

『ヤア、嫌らしき程の鄭^{ていちょう}重なもてなした。愚^{しこ}図々々して居ると抱き落しにかけられて、醜^いの窟^{いわや}のやうに陥^{おとしあな}穿にでも落されるのではあるまいか。否々人を疑ふは罪の最も大なるもの、心に曇りあれば人を疑ふとやら、ア、恥かしい、未だ**副守護神**の奴、身体の一部に割^{たくま}拋して猜疑心の矢を放ち猛威を逞^{たくま}しうせむと計画して居るらしい、恐るべきは心の内の敵だ』 【16/4 夢か現か】P53

《 「心に曇りあれば人を疑ふとやら」・・・虚心坦懐、心に何のわだかまりなく、さっぱりして平らかな心でなくてはなりません。確りした信仰を持たぬといけないようです 》

お節『結構な神の生宮と生れて其様な汚らばしい事を為さると、**本守護神**を侮辱^{ぶじよく}した事になり、本守護神は愛想をつかして貴方の肉体を脱出し、**副守護神**ばかりになつて了ひます。さうすればあのやうな浅猿^{あさま}しいさまにならねばなりませんまい。人間は神様に対し持身の責任があります。我身を軽んずると云ふことは、所謂大神様を軽んずるも同様、これ位深い慢神の罪はありませぬ。どうぞそれ丈は思ひ止まつて下さいませ』 【19/12 言照姫】P198

《 この文章は鹿公達が動物の真似をして元に戻らなくなった後の事で、「なんだ見つともない。神様の御用をする身であり乍ら、汚らばしい獣の真似をしたり、何の態だ。ちと嗜みなさらぬか」と松姫に言われた後のお節の言葉です。さらに、お節は『人間と云ふものは行ひが大切です。吃りの真似をすれば自然に吃りとなり、唾の真似をすれば自然に唾となり、聾の真似をすれば忽ち聾となり、臂の真似をすれば天罰觀面臂になつて了ふのは、争はれぬ天地の真理です。それに人間に生を享け乍ら如何なる事情があるにもせよ、勿体ない、結構な肉体を四足の真似をしたりすると云ふことがありますものか。アレ見なさい五人の方は段々身体の様子が獣らしくなるぢやありませんか。それに又人間と生れ乍ら汚らばしい、馬ぢやの、鹿ぢやの、熊、虎、竜なぞの獣の名をつけるものだから、忽ち其名の如く墮落して了ふ。言霊の幸はふ国と申しますが、言霊計りではありませぬ、行ひの幸はひ災する世の中、どうしても人間は名を清くし、心を清め、行ひを正しくせなくてはなりません。ア、可憐想に私が及ばず乍ら、言霊を以て宣り直して見ませう。さすれば大慈大悲の大神様が一度は御許し下さるでせう』万物の霊長たる人間はけしてこうした行為をしてもさせてもいけないのです。肉体は神の分霊である本守護神の納まるところで、従って持身（己れを厳しく律する）の責任があります 》

真浦『宣伝歌は聞けば聞く程気分が良くなつて来るものだ。お前に憑依して居る**副守護神**が嫌ふのだ、それさへ体内より放逐して仕舞へば何でも無いのだ。さうしてあの小さい家に百人も居る筈^{はず}がない、其实是私人より居らなかつたのだ』

留公『イエイエそれでも沢山なお声でした。年寄の声、若い者の声、鈴の様な綺麗な女の声も聞えましたがなア』

真浦『そら、そうだらう、沢山な神様が集まつて宣伝歌を合唱遊ばす事が始終あるからだ。そりやお前の神徳の頂け口だ、天耳通の開けかけだから安心して吾々の唱^{はい}ふるお道へ這入るが宜からう』 【20/3 山河不尽】P61

《 【8/16 霊縛】では多くの霊が聞いていたが、ここでは多くの霊が真浦と共に宣伝歌を唱えている 》

『ア、其方は鬼武彦様。よく竜国別を助けて下さりました。妾は聖地に於て竜国別が危急を悟り、取る物も取敢へず救援に向うた言依別の**本守護神**言依姫で御座ります』 【21/10 女権拡張】P188

られる。それは、墓場にいる霊（餓鬼等）が人にうつって飲食をさせるからである 》

・・・上谷^{うえだに}の修行場では金光教の信者計りであつたから、牛人の金神だとか、^{たつみ}翼の金神、天地の金神、^{つちど}土戸の金神、射析^{いさく}の金神などと、何れも金神の名を名告るのであつた。又竜宮の乙姫だとか、其他の竜神の名を以て現はれる副守護神も沢山なものであつた。 【38/7 火事蚊】 P65

《人にうつってくる副守護神の例》

大黒主『私は天地の大神の罰をうけ、此松の木の下に於て、手足を縛られ、自分の作った配下の鬼共に土中に埋められ、此通り首のみ地上に現はし、鷹や鳥に頭をこつかれ、毒虫に首を咬まれ、こんな苦しい目に会うてゐるのだ。お前も早く改心いたして、誠の道に立返つたがよからうぞ、私の如くなつて了へばモウ駄目だ。まだまだこれから沢山の苦勞をいたして罪を赦^{ゆる}して貰^{もら}へるか貰へぬか分らぬ所だ。早く三五教の神文を唱へて此急場をのがれよ』

イール『コレは又、異なることを承はります。あなたはバラモン教の大教主であり乍ら、何を以て三五教の神文を唱へと申されますか、少しも合点が参りませぬ』 大黒主は苦しげに、

『境界に於ては今は時めく勢なれども、未来の吾靈魂は此通り、松の下に於て無限の責苦をうけねばならぬことになつてゐるのだ。三五教は神より出でたる教、其他の教は皆枝神や人間の作った教であるから、御神慮^{いはいや}の程が分からない。否々神慮に違反した教を致して居るから、バラモン教の代表者たる此方が斯やうな責苦に会うてゐるのだ。とはいふものの、吾の肉体は副守護神の勢ひ中々猛烈にして到底容易に改心は致さない。改心さへ致したらこんな苦惱は免るのだが、大黒主の肉体がどうしても改心してくれぬので、本尊の此方がこんな責苦にあふのだ。百年後の大黒主の行末は、即ち今の有様であるぞ。サア、早くここを立去れ』 【39/7 都率天】 P101

《多くの宗教の実体は此の通りである。肉体の守護神が副守護神（八岐大蛇）によって本守護神も副守護神化してしまったのである。大黒主（バラモン教の頭領鬼雲彦）のような悪人は生まれ変わり死に変わりして悪の魂を受け継いで行く。36巻に出てくるサガレン王を苦しめたウラル教の竜雲もまたそうである。5巻に出てくる竜山別で元からの悪人であるが北光の神によて改心し、インドに渡って三五教の宣伝使となる。竜雲は改心したが鬼雲彦はさて改心出来るのであろうか。黒姫は改心出来たが高姫は？》

レーブ『成程さうすると、お前は俺の言はば副守護神だなア。何と悪い副守が居やがつたものだなア』

男『アハハ、都合のよい勝手な事をいふな。副守護神所か、貴様の本守護神の断片だ。トコトン改心致さぬと、まだまだ此先で貴様の生んだ鬼が貴様に肉迫して、どんな目に会はずか知れぬぞ。己が刀で己が首切るやうなことが出来致すから、早く改心致したがよからう。レーブばかりでない、カルも其通りだ、此童子はヤツパリ、カルの身魂の化身だ。どうだ判つたか』 【40/12 心の反映】 P168

《ここでも本守護神が副守護神（悪霊）化してしまったのである。》

『エ、それ聞くからは、何と云つても行かひはせぬ。命にかけてもお前をお民に渡してなるものか』

と武者ぶりつく途端に、蝶姫別の体は長い毛だらけであつた。ハツと驚き手をはなす途端に、蝶姫別の姿はどこへやら、黒い牛の子のやうな大狐がのそりのそりと後ふり返りながら向ふの森林さして逃げて行く。これはお寅婆アの副守護神で、小北山の発頭人ともいふべき親玉であつた。松彦、松姫、五三公の神威に恐れて姿を現はし、お寅の肉体からスツカリと放れて了つたのであつた。 【46/8 黒狐】 P121

《これが外からやってきて肉体に憑依した副守護神の実体（黒い牛の子のやうな大狐）である。このほかに兇党界の霊が有る。これらは神格の高い神人の靈威に恐れ、また、清浄な祝詞の声（言霊）等に恐れて副守護神は逃げ出すのである 》

『さうです。地獄へ直接落下すべき悪霊は此靈葉の力によつて肉体より逸早く逃走するが故に、後には善霊即ち正守護神のみが残り、安々と脱離の境を渡り得るのです。靈国に於ては之を以て靈丹と云ふ薬を作ります。治国別様や貴方が、第二天国の入口に於て木花姫命よりお頂きになつた靈葉は即ちそれです。靈に充ちてゐる薬だから、靈充と云ふのです。これを地上の人間は、ラヂウムと称へて居るのですが、語源は、つまり一つですからな』 【47/20 間接内流】 P279

《靈丹の効能である。靈丹を呑むと憑依していた副守護神がいち早く肉体を逃げ出し、後に正守護神が残るのです。》

青彦『アアお節さま、感心だ、あれ丈酷い目に会ひかけて居つた亡者を、助けてやつて呉れいと仰有るのか。その心なればこそ、再び現界へ帰る事が出来ますよ』

お節『あの五人の方も現界へ返して上げる訳にゆけませぬか』

青彦『あれは駄目ですよ。五人の男の本守護神は、既に立派な天人となつて昇天し、天の羽衣を身に着けて、真名井ヶ原の豊国姫様のお側にご用をして居りますよ。彼奴はああ見えても、副守護神の鬼の靈だから、幽界でモウちつと業を曝し、瞋恚の心を消滅させねば、浮かぶ事は出来ない。併し乍ら靈縛は解いてやりませう』 青彦は五人に向ひ、声も涼しく、

青彦『一二三四五六七八九十百千万』

と数歌を二回繰返せば、五人の裸男は身体元の如くなり、青彦が前に犬突這となり、

五人『コレはコレは青彦様、能う助けて下さいました。結構な神歌をお聞かせ下さいまして是れで私の修羅の妄執もサラリと解けました。此後は決して決してお節さまの肉体に崇りは致しませぬ。私も是れから結構な神となりて、神界に救はれます』 と涙を垂らして泣き入るにぞ、青彦は、

『ア、結構だ。お前達は私と一緒に祝詞を奏上しなさい』

鬼『有難う御座います。オイオイ皆の連中、青彦の宣伝使について、祝詞をあげませうかい』

茲に青彦は神言を奏上し始めた。お節を始め五人の裸男は、両手を合せ、青彦と共に神言を奏上し終るや、五人の姿は見る見る麗しき牡丹の様な花と変じ、暖かき風に吹かれて、フワリフワリと、天上高く姿を隠したりける。 【17/11 顕幽交通】 P166

《病に伏せていたお節は黒姫の筆先を聞いて仮死状態となり八衢に来ています。先の羽化登仙で救われた鬼彦、鬼虎たち5人の副守護神が裸男となって現れお節に絡む場面です。平助に罵倒された恨みが妄念となって、お節を痛めつけようとしているところへ、お節の叫び声で青彦が助けに来ます。青彦に大麻を左右左と振られ、また靈縛を加へられ涙を流して震えていた所からの会話である。

青彦の天の数歌（神歌）で修羅の妄執が解け、更に神言によって5人は救われます。副守護神も改心によっては天国に救われるのです》

そこへスタスタやつて来たのは、小北山に居つたお寅婆アさまである。之はお寅婆アさまの副守護神が本人の改心によつて遁走し、お寅の容貌を其儘備へて此处へ迷うて来たのである。改心したお寅は其面貌と言ひ、肉付といひ、生々してゐるが、此处へやつて来たお寅は嫉妬と憤怒の真最中に、神の光に照らされて追ひ出された精霊が、八衢界を彼方此方と踏み迷ひ、艱難苦勞して、やつと此处まで出て来たのであるから、随分厭らしい形相であつた。

お民『コリヤ コリヤ、其方はお寅の副守護神でないか、逐一其方の罪状を読み上げるから、聞いたがよからう』

白『本当に面白いものですか、あゝして娑婆へ追ひ返せば、何れ改心をして、又来るでせう』

『あのお寅と云ふ奴、彼奴ア現界で已に改心してゐるのだが、二重人格者で、副守の方がやつて来よつた

のだ。彼奴だけは何うしても番卒を派遣して引捉へ、地獄へ落さねばなるまい』

『然らば番卒に命じ、捕縛させませう』 【48/8 亡者苦雜】 P128

《このお寅の副守護神は八衢に来て間もない精霊である。それは「お寅の容貌を其儘備へて此処へ迷うて来た」とあるからである。次第に副守護神本来の姿が現れてくる。お寅の副守護神は改心の見込みがないようです》

『……あなたは生前において宣伝使ではなかつたが、現実界の人間としての最善を尽されました。これは要するに表面的神を信仰せなくても、あなたの正守護神はすでに天界の靈国に相応し、神籍をおいてみられたのです。凡て宇宙は相応の理に仍つて成り立つてゐるものです。この第二靈国の花鳥山は貴方の物です。貴方の精霊が現界において、已にこの麗しき靈山を造つておかれたのです。誰に遠慮は要りませぬ。永久に富み榮えて夫婦仲よく神界の御用をお勤めなさい。左様ならば』 【70/5 花鳥山】 P67

《 この文章から正守護神は第二天国に籍をおいているようです 》

〔問〕 靈界と夢の世界とは違ひますか。

〔答（聖師）〕 それは違ふ。副守護神は己の欲せんとする事でも覚醒時には正守護神に制せられ思ふ儘に行ふ事が出来ぬ。肉体の睡眠せる時は正守護神は肉体を副守護神に任して、肉体同じ、離れて他に活動するか、共に熟睡するので、此時副守護神は自分の天下が来たいふので自分の思うままに外的精神が活動するのが夢である。たとへば自分の意中の女があつても覚醒時には種々の制裁があつて思ふ様に言ひ寄る事が出来ぬ。さういふ場合、肉体が眠りにつくると副守は何ものにも制せられないので、自分の思ふ存分に活動するのである。昔から聖人に夢なしといふ様に、本守護神、正守護神の働きは普通夢となつては現はれないものである。時に神夢とか正夢とかはあるけれども、之は滅多にあるものではない。神夢とか正夢とかになると、其儘其通りに実現するもので、制《判》断を要する様な夢は副守護神の働きである。 【神の国 1925/01 夢の話】

《 神夢とか正夢はよいが、善し悪しを判断するような夢は余り良いことではないようだ。 》

参 考

こんぱく
魂魄の意味

〔国語辞典〕 魂は精神を、魄は肉体をつかさどるたましい〔死者のたましい。霊魂〕

〔出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』

魂魄（こんぱく）は、中国の道教や伝統中国医学における霊についての概念である。以下記述する。

道教の魂魄

中国の道教では魂と魄（はく）という二つの異なる存在があると考えられていた。魂は精神を支える気、魄は肉体を支える気を指した。合わせて魂魄（こんぱく）とも言う。魂と魄は易の思想と結びつき、魂は陽に属して天に帰し（魂銷）、魄は陰に属して地に帰すと考えられていた。民間では、三魂七魄の数があるとされる。三魂は天魂（死後、天に向かう）、地魂（死後、地に向かう）、人魂（死後、墓場に残る）であり、七魄は喜び、怒り、哀しみ、懼れ、愛、悪しみ、欲望からなる。また、殭屍（キョンシー）は、魂が天に帰り魄のみの存在とされる。

（三魂は「胎光・爽霊・幽精」「主魂、覺魂、生魂」「元神、陽神、陰神」「天魂、識魂、人魂」、七魄は「尸狗、伏矢、雀陰（陰）、容賊（吝賊）、非毒、除穢（陰穢）、臭肺」とされる事もある。）

儒学における魂魄現象の解釈

儒学（すなわち公式な学問）の解釈では、張載（11世紀）の鬼神論を読んだ朱子の考察として、世界の物事

の材料は気であり、この気が集まることで、「生」の状態が形成され、気が散じると「死」に至るとした上で、人間は気の内でも、精（すぐ）れた気、すなわち「精気」の集まった存在であり、気が散じて死ぬことで生じる、「魂は天へ昇り、魄は地へ帰る」といった現象は、気が散じてゆく姿であるとした。この時、魂は「神」に、魄は「鬼」と名を変える（三浦国雄『朱子集』朝日新聞社）。この「魂・魄」から「神・鬼」への名称変更は、気の離合集散の原理の解釈によるもので、気がやって来るのは「伸」の状態であり、気が去っていくのは「屈」の状態であるとして、気の集散＝気の伸屈・往来と定義したことから、「神」は「伸」（シン）に通じ、「鬼」は「帰」（キ）に通じ、元へ戻る＝「住」（向こうへ行く）となる。ここに、鬼神＝気の集散の状態＝魂魄と至る。「気は必ず散るものであり、二度と集まることはない」と儒学では定義しているが、これは仏教における輪廻転生という再生産を否定するためのものである。ただし、子孫が真心を尽くして祀る時、子孫（生者）の気と通じ感応することで、この世に「招魂」されるとする。一度、散じた気＝魂魄は集まらないとしつつも、招魂の時は特別とする、この一見して矛盾した解釈こそ重要であり、この説明がなければ、祭祀の一事を説明できなくなるためである。この現象に関して、後藤俊瑞は「散じた気が大気中に残存し、再び集まり来ることを許容するものである」としたが、この矛盾した解釈をめぐっては、日本の朱子学者を悩ませる種となり、林羅山に至っては、「聖人が祭祀を設けたために、鬼神（＝魂魄）の有無を半信半疑（中立的な立場）にならざるをえない」としている（『林羅山文集』巻三十五・祭祀鬼神）。これが因となって、日本近世では、無鬼論者（伊藤仁斎）と有鬼論者（荻生徂徠）に分かれた。

初期仏教

ブッダが説いた初期仏教での「無我」は「靈魂がない」と解するのではなく「非我」の訳語が示すように、「真実の我ではない」と解すべきもの（自他平等の境地を目指した思想）である、ともされている。

日本での仏教

上記の初期仏教に関する上記の解説とは異なり、ブッダは「無我」を説いて靈魂を否定した、ともされる。近年の日本の僧侶や仏教関係者によって執筆された仏教入門書等ではそのような図式で説明されていることが多い。

玉鏡 476 仏教は無神論

仏教は無神無靈魂説である。見よ、如雲如煙といふのが釈迦の教ではないか。釈迦と云ふ人は階級打破を説いた、一切の平等を説いた、現今で云ふ社会主義者である。我も人なり彼も人なりと云ふのが彼の主張である。又釈迦には数多の愛人があつた。女人禁制と云ふのは、或特別な人に対する訓戒である、一般の人に対する事ではない。釈迦の極楽と云ふのは男女相逢ふ事なのである。無論、其主張が無神無靈魂であるから、死後の極楽地獄なんか説いてはない。これ等の説は後世の人がくつつけたものである。

印度教にも仏教にも耶蘇教にも祖先崇拜と云ふ事はないのであるが、日本に渡来した仏教は神道を採り入れて祖先を弔ふ事を初めたのだ。この一事が仏教の生命を今日まで持ちこたへて来た利口なやり方である。耶蘇は祖先崇拜の我国民性を無視して祖先を祭り弔ふ事をしないから弘まらぬのである。

仏教は恰も百合根の如くなり

むけばむくほど何もなくなる

古の先祖の罪が報うとは

訳のわからぬ教なるかな

第 19 卷第 7 章「牛飲馬食」お歌 P118

新屋三右衛門

追記 P6の【18/10 赤面黒面】 H27. 2. 21

P18の お歌二首 H27. 3. 26

P16の【17/11 顕幽交通】 H27. 2. 21

P7の『靈魂と肉体の関係』 H27. 5. 27